

2 1 世紀の日本のかたち（62）

— 超高齢社会 —



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. ^{さんじゅ}傘寿の風景

日本人の平均寿命は現在、男 80 歳、女 86 歳となり、東洋の一角、この弧状列島に世界一の長寿国を実現させました。

昭和 8 (1933) 年 4 月生まれの私としても、この国の男子平均寿命まで生きたことになり
ます。

最近、友人の訃報も相次ぐようになりま
したが、先日、共に 80 歳を迎えることのできた
大学時代のクラスメート十数人が東京のホテル
の一隅に集まり、ささやかな傘寿の会を持
ちました。東京在住者が主体でしたが、関西
や九州から、またカナダから駆けつけた者も
おり、互いに戦友のように肩を叩きあったこ
とでした。

80 歳の老人達は共に青春(20 代)を共有し、
朱夏(30 歳代~70 歳) —日本の高度経済成長
に併走して働き盛りを生き抜き、今、白秋(70
歳~80 歳)を経て、玄冬(80 歳~死)に向か
う者達です。(注 1)

明治生まれの親を持ち、大正生まれを先輩
とし、昭和の大戦争、そして敗戦を経験し、
平和憲法の下で 60 年余も戦争に巻き込まれ
ずに済んだ世代です。体に刻まれた昭和史、
平成史が共通しており、個々人の履歴を聞か
ずとも分かり合える仲間たちです。

傘寿について、今一つ、かつての研究室の
学生たちが私を「サカナ」に祝う会を催して
くれました。私が早稲田大学で教師として研
究室を与えられて、1972 年~2004 年までの
30 年間ほど直接研究指導した学生たちは、既
に還暦を過ぎた 1 期生から 30 歳前半の 30 期
生まで、日々忙しく社会の最前線で活躍して
いるばりばりの現役世代、いわゆる生産年齢
世代です。

当日の会場、大隈庭園に面した早大校友会
館・楠亭に大勢が集まってくれました。中国
や台湾、韓国からもかつての留学生が駆けつ
けてくれました。私にとっては孫・ひ孫のよ
うな子ども連れも参加してくれて、会場一杯、
まことに賑やかなことで、こちらは目を細め
て見ておりました。

会場のあちこちで、10 年ぶり、20 年ぶりに
会う同期生たちは互いに夢中になって旧交を
温めておりました。傘寿の当人をタテ糸に、
幾筋もの同期のヨコ糸がつながる、文字通り
長寿者のカサの下に人と人が幾層にもつな
がる傘寿の風景でした。この会の後、ヨコ糸は
二次会、三次会に大いに盛上がった様子です。

この会場から、早大のシンボル、大隈講堂
が見えておりましたが、その時計塔の高さは
125 尺(約 38m)に設計されております。こ

れは大学創設者大隈重信の人生 125 歳説「人間は本来 125 歳までの寿命を有している。適当なる撰生をもってすれば、この天寿を全うできる」を表現したものです。

大隈重信は 85 歳で世を去りましたが、2007 年、早稲田大学は創立 125 周年を迎え、これを機に次なる 125 年 (2132 年) に向けて、250 尺 (125+125) の大隈記念タワーを大隈講堂脇に創り、「集まり散じて 人は変われど 仰ぐは同じき 理想の光」21 世紀を生き抜くことを目指しております。

2. 超高齢社会の文化

日本人の長寿化：

日本人の平均寿命は 1945 年で 50 歳であったものが、55 年後の 2000 年には 80 歳になりました。

この日本人の長寿化の速さは、戦後の日本経済の高度成長の波と波長を合わせたものといってもよいでしょう。

日本人の食生活の改善、健康・保健体制の著しい向上、そして出生時死亡率、幼児死亡率が改善され、日本人の健康を支える医療技術と体制の進歩発展が、人生 90 年ともいえる日本人の長寿化、超高齢社会の実現をもたらした理由にあげられます。(注 2)

超高齢化の諸相：

国の統計によると、65 歳以上の高齢者の全人口に占める割合が 2007 年に 20%を超え、4 人に 1 人となり、高齢化社会 (高齢化率 7~14%)、高齢社会 (高齢化率 14~21%) を超えて、超高齢社会 (高齢化率 21%~) になりました。

これは出生率の著しい低下による少子化、

若年層の減少と同時進行のもので、この少子高齢化傾向は更に続き、2025 年には全世界の 20%強が高齢世帯になり、介護の必要な高齢者の数が 6 才以下の子どもの数を上回るといわれています。

いわゆる高齢化社会の『2025 年』問題です。

更に 2055 年には 15~64 歳の生産年齢人口、いわゆる「現役世代」に対する高齢者の人口比は 1.3 対 1 になると予測されています。

この事態に対して、日本の活力の低下、財政、公的年金制度の破綻などが心配されています。国家の大胆な財政と税制の一体改革は、もはや待ったなしの場面に来ているのは確かです。また、介護福祉サービス、医療の地域的偏り、この改善策が求められています。

新しい老人像と超高齢社会の文化

人生 90 歳時代において、もはや 65 歳の人間を老人と呼ぶのは実態とかけ離れており、せめて 70 歳以上といっても違和感はないでしょう。かつての孔子の人生区分でいう「・・・四十にして迷わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順い、七十にして心の欲する所に従いて短をこえず」は、私の人生区分では各年齢に 10 才を加えてようやく納得されます。(注 3)

そしてまた、老人でも男女で寿命も異なり、かつそれぞれに多様です。長寿で元気な女性は、弱った連れ合いの面倒に加えて孫の世話や、地域の様ざまな活動に参加しています。男女の寿命の 5 歳差は基礎体力の差によるものかもしれませんが、加えて女性のこの「攻め」の姿勢にあるのかもしれませんが。老人として肉体の衰えは自然なことですが、知的興味の方は、発達した情報環境の中で、大は文明の転

換期にある地球上の刻々の動き、小は自らの病歴に重なる健康、医療技術情報などに対して高揚するばかりです。

この点で現代の超高齢社会では、自分自身の立ち位置も含めて、この社会についての学習が必要です。最近、自治体や大学で社会人学習、生涯学習が盛んなのも超高齢社会の要求でしょう。

人間に関する真理として「ひとりでは生きられない」「マン・イズ・モータル（人間とは死ぬ存在）」は少年期に学校で教えられた二大真理です。

「ひとりでは生きられない」に即していえば、「家族」が三世同居の大家族から核家族、単身世帯へと解体された現高齢社会において、地域コミュニティを三世同居、多世帯同居型につくり変えようということでしょう。「孤立からの支え合い」「自助、世代の交じり合った共助、地域単位の公助の網の目社会づくり」が求められており、いろいろな試みが地域に広がっております。

「人間は死ぬものである」については、人それぞれにこれまでの人生においてさまざまな死を見てきました。両親や家族、先輩、友人や学生たちの死。社会の片隅での自死、孤独死。戦争や災害、また 3.11 東日本大震災による理不尽な死。

超高齢社会は白秋から玄冬に向かう高齢者の「多死社会」です。個人「私」として、家族として、いかに死と向き合うかの大きな問題が突きつけられています。

「マン・イズ・モータル」は避けられないものとして、年来の自説—生命の網の目社会づくりからいけば、「人の死を尊厳をもって包む社会」であってほしいと願うものです。

超高齢社会は、日本が世界に先駆けて築きつつある社会であり、さまざまな高齢者ともども試行錯誤がなされています。想像するに、団塊世代が参入する 2025 年頃以降の日本社会は高齢者のボリュームが圧倒的な比重を占めることになり、その挙動は政治的、経済的、文化的な動向を左右することになるでしょう。これにグローバリゼーションの大波がかぶさります。

2013 年春、傘寿に達した高齢者の位置から、後衛たちの築くこれからの超高齢社会をあれこれ想像したことでした。

(注 1) 中国の四元論による人生区分

青春	16 歳～30 代前半
朱夏前半	30 代前半～40 代後半
後半	40 代後半～50 代後半
白秋	50 代後半～60 代後半
玄冬	60 代後半～

本文ではこれを現代日本の実状に合わせて読替えている。

(注 2) 時代と日本の寿命 (参考文献 4) による)

縄文時代	男 30～34 歳	女 20～24 歳
江戸時代	1600 年頃	30 歳程度
	以降全期を通じて 40 歳前後	
近代	1947 年 50 才を越え以降急速に長寿化	
平成 (25 年)	男 80 歳	女 85 歳

(注 3) 論語 為政第二

子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩。

【参考文献】

- 1) 『超高齢社会』高橋元 監修 光多長温 編 中央経済社 2012 年
- 2) 『人口の動向 世界と日本 人口統計資料集 2013』国立社会保障・人口問題研究所 編集 一般財団法人 厚生労働統計協会発行
- 3) 『高齢社会白書』内閣府 平成 23 年版 2011 年
- 4) 『人口から読む日本の歴史』鬼頭宏 著 講談社学術文庫 2000 年

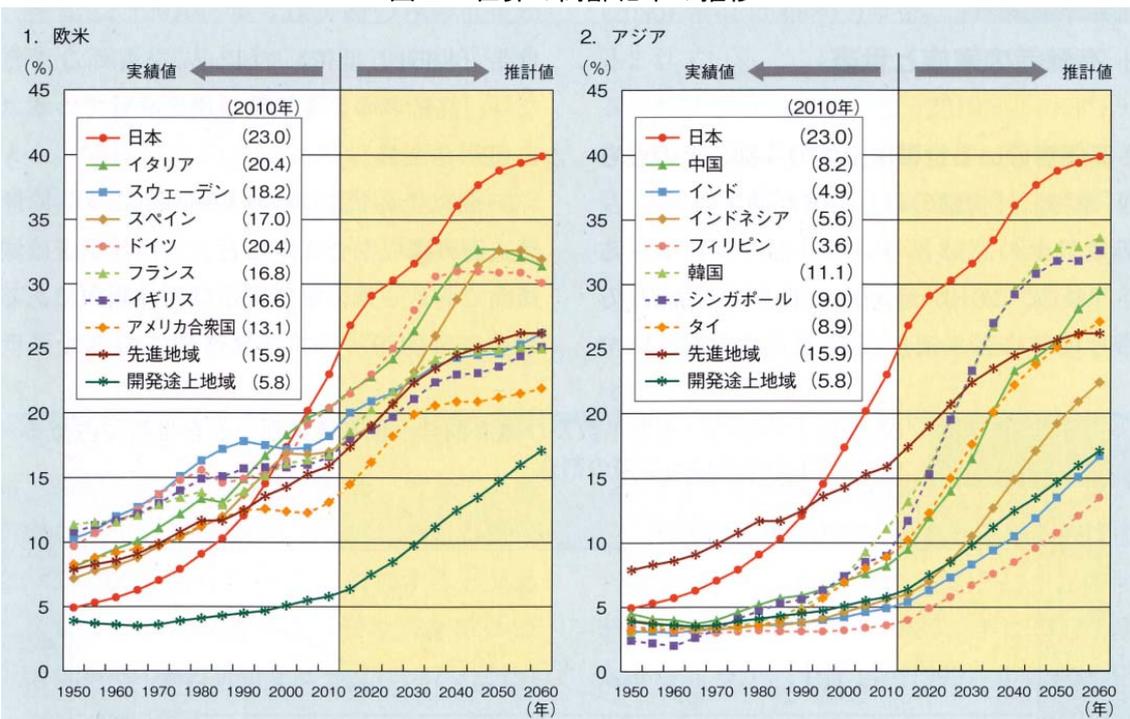
(2013.05.20)

図1 平均寿命の推移と将来推計



出典：「平成 24 年度 高齢社会白書」内閣府編 平成 24 年 7 月

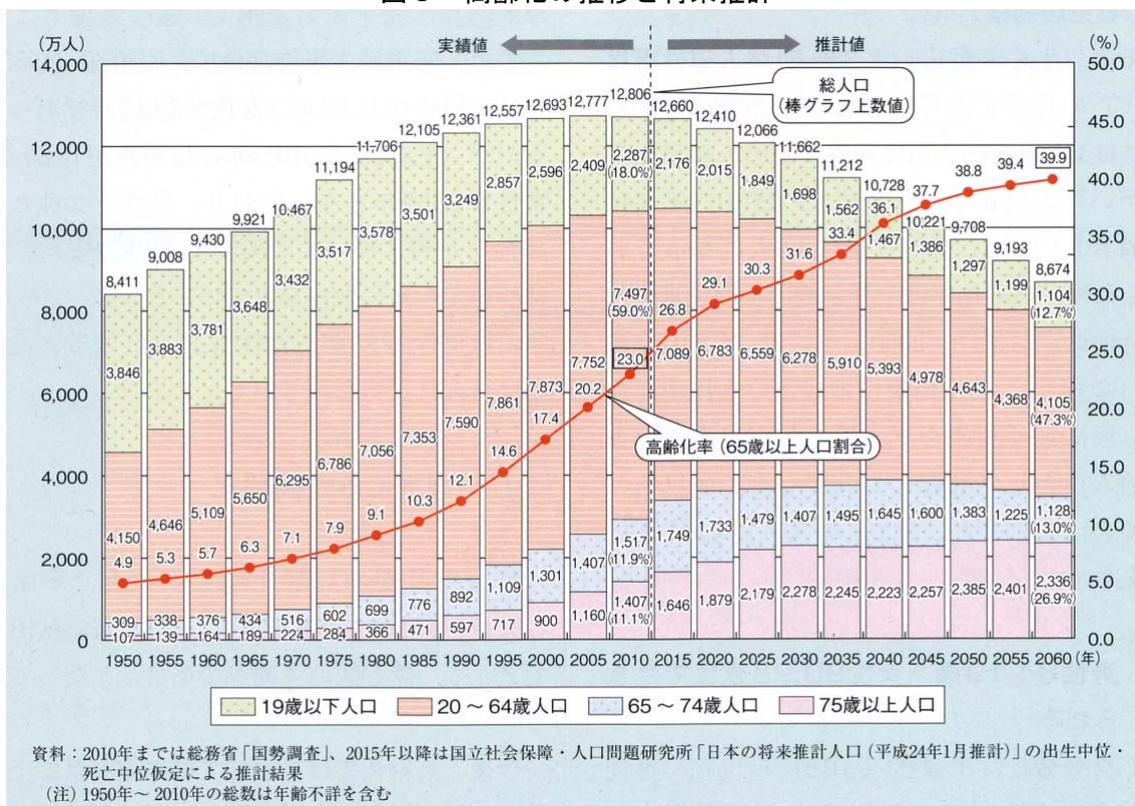
図2 世界の高齢化率の推移



資料：UN, World Population Prospects : The 2010 Revision
 ただし日本は、2010年までは総務省「国勢調査」、2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果による。
 (注) 先進地域とは、北部アメリカ、日本、ヨーロッパ、オーストラリア及びニュージーランドからなる地域をいう。
 開発途上地域とは、アフリカ、アジア（日本を除く）、中南米、メラネシア、ミクロネシア及びポリネシアからなる地域をいう。

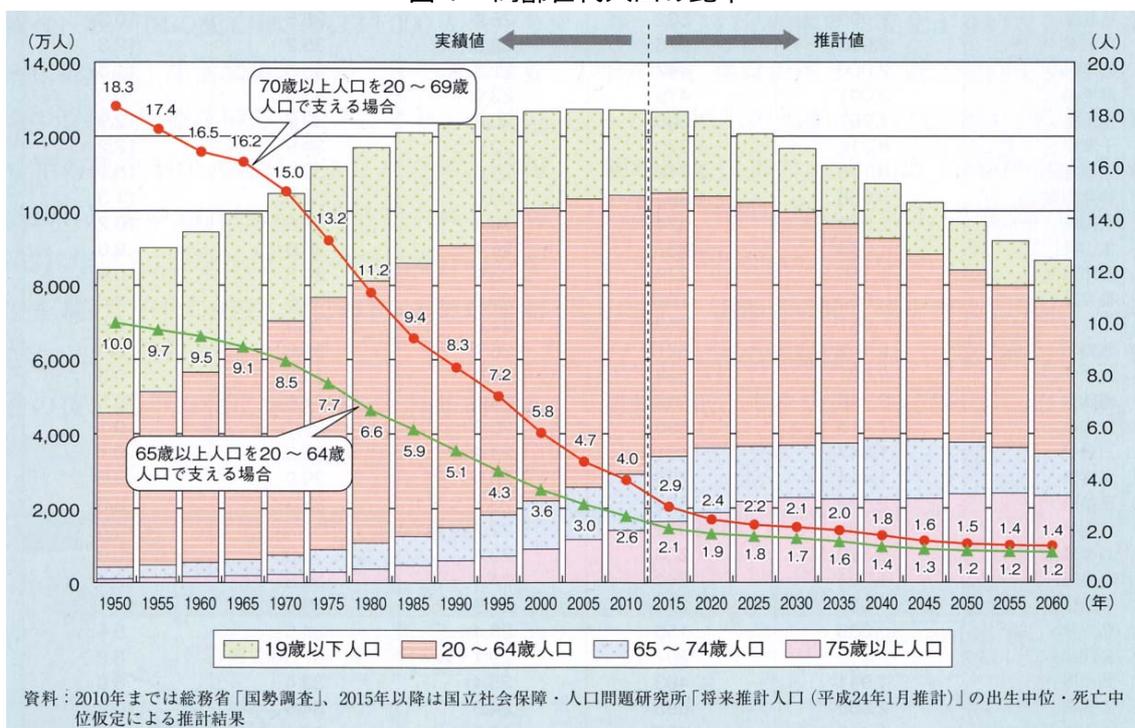
出典：「平成 24 年度 高齢社会白書」内閣府編 平成 24 年 7 月

図3 高齢化の推移と将来推計



出典：「平成 24 年度 高齢社会白書」内閣府編 平成 24 年 7 月

図4 高齢世代人口の比率



出典：「平成 24 年度 高齢社会白書」内閣府編 平成 24 年 7 月